

演題番号：7

演題名：鶏の腸管の腫瘍

発表者名：○仁平真由美 仲間京子、大場三緒子

発表者所属：中央食肉衛生検査所

### 1. はじめに

食鳥検査において最も多く廃棄される腫瘍性疾患としてマレック病（MD）があげられる。肉眼的には肝臓及び脾臓の腫大と全身の白色結節性腫瘍病変を示し、組織学的には全身性のT細胞性のリンパ腫を特徴とする。今回、他の臓器に腫瘍病変を形成せず、腸管にリンパ腫を形成した採卵鶏を認めたのでその概要を報告する。

### 2. 材料および方法

症例はH21年12月に当所管内A食鳥処理場に500羽のうちの1羽として搬入された採卵鶏の雌。品種はボリスブラウン。日齢は不明。生体検査で異常は認められず、解体後検査において、空腸に単在する充実性の腫瘍を認めた。これを常法に従いパラフィン切片を作成しHE染色を行った。特殊染色はアザン染色、鍍銀染色、PAS染色、アルシアンブルー染色（PH2.5）、免疫組織化学染色は抗ヒトビメンチンマウス抗体（ニチレイ社）、抗ヒトケラチンウサギ抗体（ニチレイ社）、抗鶏Bu-1マウス抗体（SouthernBiotech社）、抗ヒトCD3ラビット抗体（ニチレイ社）を使用して行った。

### 3. 結果

(1)肉眼所見：乳白色部と桃色部が混在する鳩卵大の腫瘍が空腸周囲を取り囲むように見られた。正常腸管との境界は明瞭であった。腫瘍断面の表層には微細な毛細血管の発達を認め、中間層は灰白色髓様、腸粘膜面には白色の偽膜様物質を認め、腸内腔は拡張していた。

肝臓は軽度に腫大し、実質は脆弱で全葉にわたり黄白色の針頭大～粟粒大の結節と微小出血が多発していた。その他、心臓外膜炎と消化管全体にフィブリン様物質の付着を認めたが、他の部位に腫瘍性病変は認められなかった。

(2)組織所見：腫瘍実質には大型で円形～類円形のリンパ球様の腫瘍細胞が充実性、浸潤性に増殖していた。腫瘍細胞は好塩基性の細胞質と大型で明瞭な核小体、粗大なクロマチンの明るい核を有し、多数の核分裂像も確認された。腫瘍漿膜面は小血管の新生と線維芽細胞の増生がリンパ球、偽好酸球および腫瘍細胞の浸潤を伴って見られた。粘膜面は腸絨毛や粘膜下織などの固有構造は完全に消失し、炎症細胞、赤血球、および細胞の壊死産物膜で置換されていた。肝臓では全体に炎症細胞のびまん性浸潤と結合織の増生を認めた。また鍍銀染色では数個の腫瘍細胞を取り囲むように細かい好銀線維が見られた。その他の染色はPAS陰性、アルシアンブルー陰性、CD3陽性、Bu-1陰性、ビメンチン陰性、ケラチン陰性を示した。

### 4. 考察

本症例は腫瘍細胞の形態、免疫染色のCD3陽性を示したことから腸管に発生したT細胞性のリンパ腫と診断した。正書によると、MDはT細胞性のリンパ腫を肝臓・脾臓などの複数の好発臓器に多発性に病変を形成する疾病とされている。しかし高齢の採卵鶏で見られるMDは局所的に比較的穏やかな病変形成を起こすこともあるといわれており、病態的に解明されてない点も多い。このため今後も症例数を重ね検討していくことが必要である。